（明治四十一年十一月三十日第三種郵便物認可）（日刊）（月曜日之祭日翌日休刊） 明治四十四年十月二十一日（土曜日） 第八百九十九號 （一）

京城新報

民團公文

京城居留民團告示第四十三號
明治四十四年度京城居留民團歳入出豫算追加及更正ノ件左ノ通リ居留民會ノ議決ヲ經京城理事官ノ認可ヲ得タリ
明治四十四年十月十六日
京城居留民團民長 古城菅堂

明治四十四年度京城居留民團歳入出追加豫算

歳入 臨時部
第二款 寄附金 金九百圓
第一項 寄附金 金九百圓
[illegible] 京城日報社主催觀光團 [illegible] 圖書器械費へ [illegible] 金九百圓

歳出 臨時部
第四款 教育費 金九百圓
[illegible] 金一百九十六圓
[illegible] 金二百二十三圓
[illegible] 金二百八十二圓
[illegible] 金一百九十九圓
[illegible]
合計金 四十七萬〇四百八十五圓

明治四十四年度京城居留民團歳入出豫算更正表

歳出 經常部
第十四款 豫備費
既定豫算額 金一萬二千八百四十五圓
更正豫算額 金一萬一千四百〇七圓
小計
既定豫算額 金二十九萬二千七百六十四圓
更正豫算額 金二十九萬一千三百二十六圓

歳出 臨時部
第四款 教育費
既定豫算額 金十四萬三千五百十四圓
更正豫算額 金十四萬四千九百五十二圓
第一項 小學校費
既定豫算額 金十四萬二千九百七十四圓
更正豫算額 金十四萬四千四百十二圓
第七目 假教場新設費
既定豫算額 金 ナシ
更正豫算額 金 一千四百三十八圓
小計
既定豫算額 金十七萬七千七百二十一圓
更正豫算額 金十七萬九千百五十九圓
合計
既定豫算額 金四十七萬〇四百八十五圓
更正豫算額 金四十七萬〇四百八十五圓

雜錄

新領土の舊山河（一） 吳越

▲鴨綠江（一ノ二）

◎頃日小閑有り、鮮北に遊ぶ二旬、行北端新義州に到りて止む、鴨綠江の架橋工事殆んど成り、餘す所僅かに溝桁半逕耳、來る天長の佳節を期し是が開通の式を擧げんとす、連を數ふる十三、大江に横はつて架せらる、壯觀無比、蓋鮮北の一名物たるべし、況んや旋回可動にして東洋未だ此比無きをや月を閲する三十餘、財を費す三百萬、竣成して茲に玉虹の中天に懸るを見るに到る、鐵道當局者の勞や多とすべし

◎鐵道局長官大屋權平は、此橋と淺からざる因緣を有す、彼大學を終へんとするや、其卒業論文題して三百萬圓の工費を以て建設さる大橋梁と、彼の論題笑つて云ふ、請ふ大風呂敷を止めよ、三百萬圓の橋梁を建設せば帝國の財政を如何と、當時帝國の豫算總額僅かに六百萬圓耳。

◎大屋云ふ他日余が是を成すまで待てよと、今や其言當り、當時の友人以て大屋法螺を吹き當てたりとなす、彼朝鮮鐵道布設の當初より局に當り、今日の盛を致す、彼の双頰亦自ら快心の笑を出すべし。

◎然れども橋梁建設直接の功は他に歸すべき人有り、現に其局に長たる技師山田龜治とす、彼頭腦明晰にして技術亦優秀、長官大屋の愛婿たり、彼亦其一半に與るべし大半に到つては未だ他にあり。

議政府探勝記（一） 牛風庵

京元線鐵道の一部は議政府まで落成して此十五日に開通式を擧げた、東北朝鮮の大動脈は之れで其の旺盛なる血液の循環を初めたのだ、該方面の經濟關係は將に大に生々活動の運に向はんとする次第で、僕が此の一部開通に方りて多大の歡喜を禁する能はざる所以で有る。

恰も善し越へて十七日 神嘗祭の休日だ、尤も惜しい事には今日は天下御免の齒入れの朝寢日で有るから、午前八時の南大門發の列車に間に合ふべく起床するには頗る以て難儀至極だが、試乘と云ふ樂しみが有るのだから之れ位は我慢せずば成るまい、其れで孤筇飄然朝鮮町の蝸廬を飛出した。

南大門驛に至れば外國語學校出の歷々が大分參集せられて居る、聞けば之れも團体旅行を議政府迄試みんとせらるのだ相である、此外に石塚長官の鞋ばきの輕裝、小宮次官の獵銃かたげの物々しき出で立等も見受け又朝鮮貴族樣も兩三名見受け申した。

午前正八時發車、列車と云ふも二等三等に仕切りたる一車のみ、龍山よりの乘客亦頗る多數で、爲めに猶三等一車を連結した、其より線路は分岐して左方へ大迂回し漢江の長流を右に見て進行す、豆毛浦部落附近に於ては溶々たる江流の斷崖上を馳走するので展望廣濶風光亦頗る佳絶大に僕の雅懷を慰めた。

朝寒や大江の渡船人を見ず
山向鷹尾花の末に雲走る

外事一束

△中淸 革命亂に對する列强觀察區々たり英曰く此内亂を利用し領土獲得を△企つ不可と佛曰く官憲不注意を屬り直隸軍暴徒に加擔せば滿朝滅せんと

△獨紙 誣妄淸の衰微は日露[illegible]すと袁の起用歐州一般に稱揚す万目集中也

△武昌 外人無事江を渡りて漢口に入る京漢電信時に通し時に不通事情不明

△革命軍主將黎曰く目下全軍一師團半猶投降絶えず直隸軍南下又然り資金△彈丸充溢し戰局既に明瞭唯外國干渉を恐ると事局北京滿洲に擴り事態急

△ノーベル賞金白耳文豪メーテルリンクの手に落つ文藝の榮譽又大なり

△東三 趙督曰く動亂擴大革軍優勢形勢逆睹す不可東三警戒を嚴にす安穩也

梁川庄八 小金井蘆洲演

第十四回

伊達政宗侯は前號の次號を遂一聞及ばれまして、梁川庄八の武勇を殊の外御賞美遊ばされ或時は側役を勤めて居る齋藤外記高則と云者に御向ひなされて 政『梁川庄八が先般來阿武隈川の化地叢を斬り、又此度[illegible]ヶ岳の女夫ヶ淵に水魔とやらを退治したと云事は、血氣の勇に逸るやうではあるが決して左樣ではない、百姓共の迷を除き諸人の難儀を救つた匹夫の勇ではない、正しく仁儀の勇に近いのぢや、彼が父庄兵衛正繁は、剛直武勇の武夫、予が彼に蟄居を申付けたのは家老共へ對して義理立、三月と經ちなば其内に事實を取調べて、差許し彼れの功績を擧げて賞與致さんと思ひしに、彼れの短慮其期を待つに遑あらずして腹斬て相果た余儀なく其家名を斷絶致させしが、其遺子庄八も父の氣質を受繼いで適れ武勇絶倫の大丈夫、末頼母敷壯者である依て近々何ぞ折もがなあらば梁川家再興ヶ致させ遣すべき心得である」と御内命が御坐りました、此外記は庄八とは同年で竹馬の友、殊に和田但馬の門で同窓に學び斷金の交り深く、意氣投合して兄弟の約を結んだ間柄でございますを豫て御承知だから政宗侯仰せられたのです、外記は大に悅んで取敢ず、師の和田但馬に物語を致しました、但馬も倶に悅んで、或時庄八が岩沼から出て來た時に、右の話を致し 但『斯樣な次第であるから近々何かの機を見て御取立の御沙汰があるに定まつて居るのだから、今後は假にも粗暴の振舞をせぬやふ、身を堅固に持て御呼出しを相待つやふ、是は申も父の遺言を守つて文武兩道を勉めたればこそぢや、父も草葉の蔭で定めて悅んで居らう」庄『誠に斯く相成りましたも、恩師が御丹精下さりましたる賜物で有難い、存じます、御取立に相成ますれば父の最期も短慮の廉も些と御坐りまするから藻庭殿は恨みは致しません」と殊の外に悅び、岩沼へ立戻りまして德兵衛へ話しを致しますと、德兵衛は我身の如くにホク〳〵悅んで 德『誠に御目出度ら坐います……早速旦那樣の御墓へ詣りをして申上ましたら、嘸御悅びでございませう御靈魂を慰めますために參詣を致しませう」と連立て唱名寺へ墓參を致し、今日は御呼出しがあるか、今日は何とか御沙汰があるかと、頭の上に烏の啼かぬ日は有つても語り出さぬ日迚はなく待受ましたが、三月經つても四月過ぎても梨の礫の音沙汰もありませんから、德『サア德兵衛は氣が揉めてなりません 德『若旦那樣例の御取立の一條、其後何の御沙汰が御坐いませぬが何う云ふ者で御坐いませう」庄『左樣さ如何なる譯か乃公にも判らんが、何うせ來月の三日には御節句の禮を兼て御城下へ參るから、其節恩師に伺つて見たらば大概は判るだらうと思つて居るんだ」德『左樣ですね然う遊ばして御覧なさいまし」と話し合つて明けた慶長十三年三月三日、庄八は早朝に起出で支度を整へ岩沼を立出で、仙臺の城下まで五里、懇意の人々の處を訪ひ、恰度午刻頃榴ヶ岡の和田但馬先生の許を訪ねました。平素無沙汰の詫を述べ上巳の佳儀の禮を述べ然る後ちに 庄『エー先生伺ひますが豫て先年來梁川家御取立の御内命が政宗侯より有之し趣きでしたが、未だ何の御沙汰の御坐りませんのは彼は如何相成ましたのでせう……德兵衛は老年の一徹から何で斯樣に長引くのであろうと一層心配致しますが……齋藤外記は私の竹馬の友固より僞りを云ふ樣な人物ではござりませぬが如何致したのでせうか」と問ひ掛けました時に和田但馬は眉を顰めて庄八の顏を見詰めて、思はず長大嘆息を洩し 但『イヤ其事に就いては其方へ對して誠に氣の毒に存ずる……實は齋藤外記が先達て參つて申すには、先頃中殿樣より梁川取立の御内命が有つて庄八の出世を悅ぶの餘り取敢ず御話しを致しましたが、實は些と早まつた事を先生に申上げたと後悔致しましたと云ふのは其後藻庭周防御前に罷出で、彼れ梁川庄兵衛は深く君を恨み奉り、腹を斬て相果てましたる者、然るに其息子が如何に武勇に勝れたればとて、家をれ立遊ばしましては、甚だ御家の成規に戻るのみならず、斯くては賞罰を明らかにして諸士を取締る事が出來申しません、僅か魚鱧を退治したる位の者、遂て御取立に相成るならば手前は今日限り御役御免を蒙ります、と言葉巧くみに申上げた故、殿樣に於せられても老臣の言を憑つて取立ると云譯にもならず且又其申す處も理に近き件もあるで、家名再興の御内命は御沙汰止と相成た次第でござると、外記が殘念がつた話であつた」

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐ可からず

定價 本紙一枚金三錢 ▲一ヶ月前金三十錢 ▲三ヶ月前金九十錢 ▲六ヶ月前金[illegible] ▲一ヶ年前金[illegible]
月曜日及び大祭日の翌日は休刊（日刊）
廣告料 [illegible]
發行兼編輯人 高木久太郎
印刷人 松久錦一郎
發行所 京城西小門通 京城新報社 電話[illegible]
仁川支局 仁川宮町三丁目 電話二一一番
東京支局 東京市京橋區南佐柄木町七番地

京城新報

關稅据置は同化政策に矛盾す

現時の朝鮮經略第一要諦としては、依然として之れを日本化せしむべきにあるやは、何人も否定せざる所なり。從來朝鮮總督府の統治事蹟に就て稽るに半島民族の同化に努めしもの尠なからず、從つて效果の又見るべきもの皆無に非ざるも。吾人は未だ之を以て滿足するこど能はざる者なり。世人常に日ふ、半島民族同化策としては、數百年來苛斂誅求に惱まされし彼等に善良の政治を施こし之を指導するに撫恤を以てし、之を啓發するに愛撫を以てすれば、必ずや彼等は我仁政の有難さに感泣し、不知不識の間遂に我に同化するに至る可しと。眞に然り、吾人素より此說に對して異議を挾むの餘なきのみか、總督府の半島民族同化の方針も亦根據を茲に置かれざるとは今更言はずもがな。見よ、併合當初恩賜金其他の方法によつて、貧弱なる半島民族を賑恤され、總督政治の第一着に先づ鮮民に我仁政の洪大無邊なるを示し、彼等又我恩澤に感泣せり。而して產業、敎育衞生、交通其他施政上の諸設備皆半島民の福利を本とせざるはなく、之が爲に半島民をして危險なき社會に生存することを得せしめたるは蓋し疑を容れざるも。唯之のみにて半島經略の要諦終れりとして安如たらむとするは吾人の竊かに取らざる所なり。吾人曾て論ぜしことありしが如く、半島の社會現狀は國家組織の中心となる可き中產者を缺き、極めて小數の富者と、最も多數なる貧者の二階級に限られをるを以て、其同化を欲するや先づ賑恤の事に出づるは元より當然の事に屬するも。由來賑恤の事たるや、涸渇せる稻田に畜式人工的灌漑を行ひ、將さに枯れんとする稻に生氣を起さしめると同じく一時の事に屬し。際限なく之を行ふことの不可能なるは事新しく言ふ迄もなし。故に此以上平時によつて經濟上の利益を半島民に獲得せしめ。以て人工的灌漑の效力が天然の降雨によつて始めて全きを得たりしと同樣、鮮民同化の端を開かれ一恩惠賑恤の效力を永久に保全するとは、半島統治上の最大急務なりと言はざるを得ず。爲政者にして此點に想到するなからむか、縱令善美の制度を布き、文明的の施設をなすも一方には生活難に苦しむ者漸出し。遂に善良の政治も何等の效用をもなさゞるに至らむ。況んや制度の改善は勢ひ租稅の增徵を免かれざるに於てをや

如上の見地よりして、吾人は永久不變に鮮民に經濟的利益を享受せしめ彼等の生活をして安全ならしむるには。本土及鮮土間の移出入品關稅を撤廢するの外策なきを信じ。政府に向つて之が斷行を望むや切なるも。如何せん政府は併合當時各國との條約改正上に顧念する所ありしか將た他に理由ありしかは知らねど、半島の關稅關係のみは尙ほ十ヶ年間從來の例に依る可き旨を各國に宣明せり。故に吾人の希望は政府に於て涉外的障碍の恐れありとして、直ちに之れを容るゝこと能はざる事情もあるべし。然れども、列國との條約改正は殆んど終りを告げ各條約國との間に半島關稅に就て複雜なる交涉を見ざるの今日、政府は可及的關稅据置期間を短縮すとの手段を盡し、本土半島間に於ける經濟的墻壁を撤去することに努力せざる可からざるなり。若し政府にして宣言期間は絕對に之を爲すを得ずとなさば、政府は一面に半島民同化に熱しながら、他面に於て之を破壞する即ち予盾せる政策を執りをるものと云はるゝも答ふるの辭なかるべし。

殊に、吾人が屢々主張し、年々在鮮商業會議所によつて提唱せられ、今や半島のみならず全國商工業者の要望して止まざる鮮米移出入稅の廢止問題に至つては。毫も外國の利益を侵害することなく、所謂國內法の變改に關するものなれば、政府及朝鮮總督は之に對しては何等顧慮を要せず、斷じて行へば鬼神も哭くの例の筆法にて斷行して可なり。只鮮人の同化を唱へ、而かも關稅撤廢を躊躇するが如きは吾人をして政府及び總督の把持する同化政策なるものゝ如何なるものなるやを知るに苦しましむるものなり。

北京特電

▲兩軍の小衝突
十八日漢口附近に於て官兵と革命軍との間に小衝突あり革命軍利あらず

▲瑞張二大官處刑
前湖廣總督瑞徵は流刑に武昌駐在の師團長張彪は死刑に各軍法會議に於て宣言されたり

▲陰昌の漢口着
征討軍の總督陰昌氏は二十日直隷軍を率ひて漢口に到着の筈なり

▲張人駿逃走說
北京佛國武官の言に據れば南京に暴動起り兩江總督張人駿氏は逃走せり

▲騷亂地外の情況
淸國各省地方長官は目下の騷亂地を除くの外は平穩の狀況にありと外務部に報告し來りたるも政府側の報告に付ては與信を措き難し

▲成都地方危し
四川總督趙爾豐は成都及其他の地方危急に迫れる旨電報せり

▲福建省に匪徒
福建省龍岸に於て匪徒蜂起し官舍を砲擊せしも擊退せられ十數名逮捕せらるこれ革命軍の煽動による

▲征討軍輸送
奉天第二十鎭步兵二個大隊及砲兵一個大隊十九日京奉線にて輸送され多分直隷省の留守となるべし

▲革命軍指揮官脫走
革命軍指揮官黎元洪は脫走せりとの風說あり

▲袁遂に起つ
袁世凱は四個の條件にて就任を承諾し革命軍討伐の總指揮權を與へられたり

▲袁世凱の遠征軍
袁世凱は二十日兵數千を率ひ遠征の途に上る筈なり

▲革命軍の挑戰
革命軍は官軍を江岸にて追擊せしも官軍に擊退され官軍江岸を恢復す又十九日革命軍は更に漢口附近の官軍に攻擊を開始す

東京電報

▲海軍の南淸派遣
千早、卷雲、敷波外驅逐艦七隻は二十日南淸へ急行を命ぜられ各軍港地を拔錨せり

▲東北地方暴風雨
北海道青森巖手各地方に暴風雨あり被害多し

▲伊公銅像除幕式
來る二十六日神戶大倉山に於て伊藤公銅像除幕式擧行について末松子夫妻は伊藤博邦公に代りて當日參列の上除幕を行ふべしと

▲河南軍投降
漢口發其筋への着電によれば河南軍は續々革命黨に投降す直隷軍の先發隊は着したるも態度不明なり

▲招商局汽船借上
上海發三井物產着電によれば招商局汽船五隻は軍隊輸送のため支那政府に借上げられたり

▲英艦隊長官漢口着
在漢口川島第三艦隊司令官發海軍省着電によれば英國東洋艦隊司令長官カインスロー海軍中將は十七日漢口に着せり（同長官は所在地首席指揮官となれり）尙當局希望により第三艦隊司令官川島少將は各國居留地護衞の指揮を執行す

雜報

●三南線の開通式
三南線の一部太田、漣山間は工事竣工したるを以て二十一日鐵道局にては漣山停車場に於て開通式を擧行す

●安奉線の開通式
安奉線開通式は十一月四日安東縣に於て擧行に決して居たるに鴨綠江の開橋式は既報の如く之に先ちて同月一日に擧行する事となり當日は寺內總督も臨場する筈に付滿鐵會社も四日を一日に繰上げ兩々相對して祝意を表せんとの議起り協議中なりしが愈よ來月一日午後一時半安東縣江岸の新設倉庫を式場に用ゐる式を擧ぐる事に變更し目下其準備中なるが尙其以前に三十日午後二時發車にて本溪湖鷄冠山間に双方より試運轉を行ひ草河口に於て兩車相合して成績を見三十一日より愈々改正時間に由る奉天安東縣間の廣軌運轉營業を開始する順序となりたるが尙開通式當日には來賓者の爲めに特に午後七時安東縣發翌二日午前四時半頃奉天着の臨時列車を運轉する計畫なりと又同線關係請負者に於ても相當の催ふしを爲さんとて目下相談中なりといへば當日の安東縣は近來稀れなる賑を呈すならんと云ふ

●寺內總督漣山行
別項の如く鐵道局にては二十一日忠淸南道漣山驛に於て湖南線一部の開通式を行ふにより寺內總督明石少將等は二十一日午前六時南大門發列車にて漣山に向ふ由なり

●農工債券發行決定
農工債券の發行は豫て吾社の主張せる所なるが度支部にても先般來該債券發行の計畫あり此の程にいたり愈々發行のことに決定し昨今之れが方法及び銀行割當利率等に就き審議中なるが一般農民の收穫終了時期迄には決定すべく其の上にて實行の運びにいたるべしといふ尙右債券發行額百萬圓は各地農工銀行の貸出事業資金を標準として定めたるものなりと

●京畿柞蠶有望
鴨綠江流域の滿鮮地方は由來柞蠶の產地として有名なるが過般京畿道廳より今年管內に生產せし柞蠶繭の處分に關し平北道地方の狀況視察に赴きし者の報告によれば京畿道の產繭は平北方面の分に比し繭結繭量等非常に良好なりと云ふ

●淸國動亂と再製鹽
淸國の動亂が今日の如く中淸方面に止まらば差支へなきも若し風評の如く山東省方面にも多少の影響を及ぼし遂に騷擾するに至らんか目下朝鮮に需要する鹽の大部分が同方面より輸入する支那鹽を再製するため其輸入の杜絕を見るべく其際は關東州の製鹽及臺灣鹽の廻送を見るを以て需要に困難を感ぜざるべきも價格に於て多少の騰貴は免るべからざるべし最も官鹽の製造蓄積額多量ならばかゝる場合に當りて輸入鹽の販路を襲ふを得べき官鹽の製造額不足なるは聊か遺憾なりと某當業者は語り居れり

●中淸動亂と朝鮮貿易
……京城華商總會董役の談……

中淸動亂と朝鮮の貿易につき各名流の意見が貴紙上に掲げられてあるがヤハリ方々の所說の通り中淸の動亂が朝鮮の貿易に影響を及ぼすことは昨今のところでは少しもない要するに支那から朝鮮に輸出する品物は重もに絹織物麻紅茶等で其の他の品物は關稅の關係上直接外國から輸入して居るが本年は支那よりの輸出が例年よりも多少增加し居るやうである而して或る論者は絹織物の本場たる蘇州邊が動亂の爲め上海の市場に輸送することが不可能であるといふだらうが仕入時季以前なら兎も角昨今では殆んど仕入濟となつて居るから其の心配はない又支那に取つては經濟上の打擊は勿論であるが唯紅茶の本場たる漢口が戰亂のためにあらされ爲めに來年の生產期に於て多大の損害を崇りはしまいかソレから朝鮮に輸入する金巾は重もに外國產で上海經由の分は多少影響を蒙るだらうが支那には何等の關係はない但し銀の暴落は非常なものだらう

謹告
新年御歌會御題は『松上鶴』と仰出されたるが本紙は例年の如く右の御題により一般讀者諸君の吟詠を募集し新年の初刷紙上に掲載すべきに就き今より推敲を凝らし置かれたく豫め謹告す

●記者案內狀返附
京城新聞通信記者有志團は二十一日擧行さるべき湖南線開通式へ臨場せざることに決定したるを以て二十日付左の書面を附し各案內狀を一纏として大屋鐵道局長官の手許へ返附したり

拜啓湖南線開通式御擧行に就き御招待に預り候得共都合に依り出席仕らず候間左樣御了承被下度先は不取敢御斷り旁御案內狀御返付申上候敬具

明治四十四年十月廿日

朝鮮通信社長　友枝英三郞　外八名

鐵道局長官大屋權平殿

右の如く有志記者團が擧つて招待狀を返附したるは一見非常識の如くなるも聞くところに因れば記者團側には前記の措置に出でざるべからざる正當の理由を有するものの由なり

●定例長官會議
廿日午前九時三十分より總督府會議室に於て定例長官會議の開催あり寺內總督以下各部長官出席し政務の協議をなし十時三十分散會したり

●英大使歡迎晚餐會
來る廿三日入京の筈なる英大使に對し寺內總督は多分廿五日頃官邸に於て盛大なる晚餐會を開き大使を歡迎すべしと云ふ

●敎科書編纂近況
總督府學務局の編纂課にて朝鮮人學徒用の敎科書編纂中なるが目下主として普通學校用の國語讀本の編纂中の由にして遠からず脫稿するならんとの事なり尙過般來沖繩臺灣等の各殖民地を視察したる小田事務官の用向は各地に於ける敎科書取材のためなりとの事なり

●朝鮮皮革會社近況
中山友雄宇賀厚彥氏等の主唱に成る朝鮮皮革會社は既に東京にて創立總會を濟し總督府に重役の認可を得て近く登記を濟し營業の準備をなす迄に運び居る由、同會社は既報の如く資本金百萬圓にて工場を永登浦に設け主として牛皮を製革し年額三萬枚位を內地に移入する計畫にて來年三月頃には工場も完成すべく追つては附帶事業として製靴其他皮革製品作造に及ぼす考案なりと云ふ

●京城民團內地人所有地所
京城民團に於ける內地人の所有土地は宅地四十六万六千五百二十九坪畑地六十六万三千九百六十坪山野及び池沼六千三百四十坪にして此價格宅地五百四十二萬一千三百〇四圓畑地四十七萬〇六百五十六圓山野及池沼一千九百〇二圓なりといふ

●民團稅制調查案（七）
……峯尾民團助役の談……

民團の生命如何は固より窺知すべからずと雖も明年の議會には附せられざるものゝ如し、理事者側としても勿論其生命如何は計畫上幾分の懸念なき能はずと雖も改良す可きを放任する如きは不可なり但し之が爲に經費を要するも之は避けたきものなり、民團稅制に就ては余一箇の私見としては收入に課稅するよりも財產に課稅する方宜しからんかと思ふ、所得稅を主たるものとして內地の如く千分の五十五迄課すとすれば三十萬圓近くを得て敢て之に基いて一案を立て得ざるに非ずと雖も余は當地の實情に鑑みて財產稅を主要なる課稅とせん事を欲す、蓋し未開地に來る者は多く初めより土地を買ひ家屋を造り收入を得んとする者に非ずして商業或は勞働等によりて貯へ得たる餘資を以て土地家屋を獲得する者なれば之等の所有者は皆財產家と云ふを得可く現今にても家屋約十一萬餘戶あれば充分の稅金を之に依つて得可しと信ず、且所得稅の場合の如く虛僞の調查なく年々の變更なく事務上及豫算編成上の便宜も多し、而して專ら財產稅に重を置くとすれば自然營業稅、所得稅の輕減を計らざるべからざるは無論なり、但しさはいへ要するに擔稅力にぞ適應すべき譯なれば山縣政務總監或は宇佐川東拓總裁の如く年俸一萬數千圓を得て官舍、社宅に居住する人に對し僅少の所得稅を課するは甚だ不可なりと思ふ猶民團營業の收入を計りて財源を之に俟つも頗る恰好なれども今日の場合稍先き走り過ぐるやの感あり云々

●ジ博士と朝鮮水產
先般來鮮したるジヨルダン博士は去る十日橫濱解纜歸米に際し庵原水產課長に書を寄せ朝鮮魚族に關し其蒐聚陳列等に非常に盡瘁されたる好意を謝し更に歸米の上は標本によりて研究をなし朝鮮水產に關し著述をなし世界の學術界に紹介すべしとの事なりしと云へば出版の上は大に益する處あるべしと云ふ

●木綿金巾輸移入額
最近朝鮮に輸移入せる金巾及び木綿類の輸移入額を掲ぐれば日本木綿二十六萬六千二百圓黃金巾七十六萬九十圓晒木綿三十一万九千九百圓天笠木綿六萬三千六百圓なりと

●銃獵免狀の下附數
京城府內の各警察署にて去る十四日迄に銃獵の免狀を下附したるは三百七十一通にして內龍山の分百十四通なりと

●秋山參事官の歸任
東上中なりし秋山參事官は二十日午前南大門着列車にて歸任せり

●檜垣京畿道長官の歸期
十九日出發水原、陽智、揚平、驪州の四郡へ出張したる檜垣長官は來る廿七日歸任すべしと云ふ

●大橋主幹の歸京
木浦光州全州群山に於ける赤十字社愛國婦人會總會發會式等に出席したる大橋本部主幹は十九日歸京したり

●愛國婦人會修養講話
愛國婦人會朝鮮本部役員有志は釋宗演師の入京を機とし二十一日午後一時より京城ホテルに於て修養講話會を開催し同師の講話を聽講する由なるが會員は勿論其他の婦人も參聽差支なしと

●淸州の農產品評會
朝鮮農會淸州支會に於ては來月十七日より一周間忠淸南道全般の農產品評會を開催の筈也

●朝鮮農業月報十月號
發行所は京城三輪商會戶田泰藏氏にして朝鮮各地の農業情況及改良農具の使用說明等委曲記載しあり農業經營者の爲めに最も參考と成可資料ならん同氏は農業界の爲めに犧牲となり毎月三千部宛發行し全道に普く無料配布し居る由

●高義誠氏の葬儀
前李王職事務官高義誠氏の葬儀は廿日午前三時自宅出棺廣州郡產周面に埋葬せらる

公人私人
△牧瀨五一郞（總督府囑託）十九日出發釜山へ
△脇谷洋次郞（農科大學助手）同
△長尾牧藏（金融組合理事）同入京
△荻谷籌夫（朝鮮新聞社長）同浦尾投宿
△村上唯吉（平壤控訴院書記長）同京城ホテル

▲京城手形交換高▼

	金高	枚數
十月二十日	二五〇、八六四、〇九〇	四五六

▲治外法權▼
此頃はドコへ行つても話は南淸の動亂で持切り、黃とか孫とか黎とか云ふ人達が急に大人物になつた▲併し昔から言はれる通り腹が減つては戰は出來ぬ、ココラに茶屋が有るなれば飯を炊かせて合點か、カシコマツて合點ヂヤと、マア此んな譯で飯の供給が無ければ到底戰は出來ぬ▲そこで、ドウです、叛軍は例の軍票を發行して軍費金として居る、トコロが此軍票なるものは、其表面に何が書いてあつても、實を云へば引換無能力者の發行した不換紙幣で、云はゞ紙屑も同然のものだ、アー如何に革命軍の宣言が堂々でも、今の文明世界に紙屑の軍用ではダメだ▲サテ北京方はドーカと云ふに、之れ以て軍用金に事缺き、四國銀行から五百萬圓を借り入れて用を足さんとする程の窮態、如何な勇將猛卒があつても、ヤレソレと花々しい討伐は出來ぬ▲アー金の世や金の世や、今頃は北京でも武昌でも嘸カチカチと金を欲しがつて居ることであらう、サテ此邊の事情から判斷すると、腹の減つた同士の喧嘩は永續きは仕舞い▲本紙の三面子が、過日德富某の官舍借個の事實を書いた、すると、と云ふ譯でもあるまいが、總督府が急に官舍の取調べを始めた、官有物濫用は國法の禁ずるところ、德富某はドー處分されるかモノだ▲昨本紙掲載の病氣罪惡論はチト酷の樣だが、理屈だから仕方がない、ソンヂヨソコラの不攝生家は宜しく反省して可なりだ▲大屋鐵道長官と記者團との間近來兎角意志の疏通を缺く、勿言記者團の措置を不穩當と、民間操觚者無視の罪はまづ大屋にあるぞ。

●仁川卯月會俳句第九輯（三）

…ム題、月さまゝム…

一千六百二十句中逆列
披粋上座八十章
彩雲居丹葉撰

第七

有線無線一切平等藝の月　哲丹

選者云ふ　骸骨の上を粧ふて仕たる花見は昨日の夢と過ぎて今は只。

第六

ひと列の鳥金情ゝ月の空　是空

選者云ふ　限なき空の限とも見へて、是一幅の墨畫たるを失はず。

第五

詩趣湧いて觀月の宴酣に　醉仙

選者云ふ　高蒔繪したる重ね硯を配置して、筆のまゝくに、賜ふ料紙へなぐり書するも興深し。

第四

月ゆらく池中の鯉の溌剌と　竹窓

選者云ふ　うゃろ寒き汀に飛び込ひとして飛び込み得ず、唯だ、據り沈默を守る蛙、开が上を颯と撫で渡る水畑りを、物の餌とも啖づしたか躍りあがる尺餘の鯉魚一尾三十六鱗金と光る刹那、水面にゆらめく王兎の銀波と和して、急よりも緩に、ゐがく水輪の晶なる景一趣…、穿ち得て好個の名畫題。

●白木屋ご改築

東京日本橋白木屋呉服店は先般來增築工事中の處、愈々今回落成を告げたるが、他商店に未だ曾て見ざる大餘興場及新式なる昇降機、寫眞業等一切の設備をもなし、大に面目を一新せり、殊に商品も從來の呉服、洋服、太物類の外、一切の日用品をも網羅陳列販賣を開始せりと云へば上京の際は是非同店に至り通信販賣課を訪ね便宜を得られたし、尚ほ地方人の買物は、同課宛注文せば直ちに用辨小包郵便にて發送すべしと云ふ

（改築したる東京白木屋呉服店）

●京元線初乗記　松琴生

汽車はいつしか清涼里驛に止まる、停車場は新たに建てられて快く、驛前より坦々たる大路西に走りて京城に通り電車頻りに往來す、遙かに南山の翠色と續きて東大門に對す、峭然たる北漢連峯の諸山東北に屏立し、近く閔后墓畔の松林をいる、時に空は殘りなく晴れて一點の雲翳なく爽氣自ら車窓を壓す、吹き入る冷氣の身にしむも厭はで車窓を開きて眸を放つ、汽車は倉洞驛を過ぎて、山村水郭の間を走る、稻田は半ば刈られて、刈穂の干されたるが多く、山畑には蕎麥の黒きに粟の黄色なるが、所々を彩るも面白く、近郊の山多くは禿げたれど、僅かに殘れる林樹のすでに秋を染めなしたるもあり、山添の藁屋の屋根に閒々と蹲れたるは夕顔にして、其色の眞紅に見ゆるは唐辛の干したるなり、沿道の風物にあこがれ居るうち、汽車は目的地たる議政府に着きぬ、便乘の貴人紳士を始めとして乘客の多數は溢るゝ如く汽車を下りぬ、當地の民家には造花國旗などの美はしく飾られて、盛んに今日の吉き日を祝す、北方の原野の中に紅白の幕を張りめぐらしたるは、開通の式場にやあるらん、折々に煙火など打上げられつれのがし、散し行く數十の乘客、物珍しげに集ひ觀る數百の鮮人、山間の一寒村忽ちにして雜閙の街と化しぬ

驛より北してこの混雜の境を脱し、二十町を去る回龍寺に向ふ、野邊の八千草今を盛りに妍を競ひて、女郎花刈萱藤袴など殊に多かり、路は草深き隴野の間を行き、蜿蜒たる阪路を攀ぢて西北に進む、漸くにして回龍寺に達す、古昔李朝建國の事業を助けて有名なり僧無學が、久しく駐錫したる所とかや、佛堂多く荒れて、昔時の面影を止めされど、境自ら幽邃にして轉た塵外に在るの思あり、亭中一基の古塔を存す塔面多くも朽したれど、細密なる彫刻の跡驗りて、古への盛時を忍ばしむ、院内の石、踞して趣倫をたのしめ、時過ぎ、歸路に就ける觀客の後に尾して議政府に歸り村中を徘徊して時を費し三時五十分發の列車に入れば、列車には式に臨みたる來賓等の多く、獄語酔盤中々に盛んなり、車窓に倚りて同じ眺めを繰返しつゝ、南大門に歸り着けば、暮色蒼然として人に迫りぬ

제799호 1911. 10. 21.

明治四十四年十月二十一日　京城新報　(土曜日)　第七百九十九號　(五)　(第三種郵便物認可)

チャンピオン傳(九)

紅葉屋代理店主 曾野峻輔君

此所に云ふ紅葉屋は東京日本橋兜町に店舗を有する有價證券現物賣買問屋で主人は有名な和歌山縣人神田鐳藏と云ふ男だ、曾野君は南山町三丁目に其京城代理店を經營して居る、當年將に二十九歲、前途多望の青年でチヨンガー生活をして居るものだから藝妓連中の野心家の注意の焦點となつて居る、君が紅葉屋の代理店を經營するに至つた因緣は一朝の事でないけれど夫は此所に物語るも多くの興味を惹くに足りないから略するが君が京城に於ての前身は新聞記者である、出て直ぐ引込んだる彼の東洋日報では三面主任として隨分辛辣な筆を弄して奮闘したものだ、四十三年の八月社長美和君が沒落と共に廢刊となるや君は直に「絹婦留比」なる新町評判記兼細見記みた如なものを執筆發刊して大に粹界に雄飛しようと企てたがこれ物堅い方に睨まれて第一輯を發刊したのみに終つた、其後昔取つた杵柄と云ふ格で紅葉屋代理店として現物賣買に從事することになつたのだ、而して間もなく同業組合の成立に盡力し更らに取引所の設立運動にも盡力したが其功名に急なる年少氣鋭の君の意見は所謂老成派の容るゝ所とならず手を退くに至つたのだとか、君は遊藝に深き趣味を有して居る、其所爲であらう三面記者としては得安からざる伎倆を有して居る、都々逸も作れば發句もやる就中發句は自分ながら上手だと云つて居るが果して何うか、疑はしきは避けよの本文に從ふて「上手だ」と云つて居ると云ふ丈けに止めて置く、君は更に碁も將棋もやる、やる事はやるが或人は拙手の横好きだと云つて居る、さらば是れ皆な上手では無いと見ゆ、到底チャンピオン所の沙汰でない然らば君の藝は悉く糊塗の西瓜で生つ囓りかと云ふに大に然らずである、而して开は何かと云へば歌澤節である、歌澤と云へば近頃遂に粹人仲間に持て囃さるゝに至つて芝金派だ虎右衞門派だヤレ家元だ藏元だと粹を生命の歌唄ひが柄にもないイガミ合を演る程に流行ものの一となつた、或人は此の歌澤の流行を以て鯛に飽きたれた大名が目刺を賞玩すると同一で時のものだと云つて居るが無粹の僕には判らない、現に角曾野君の唄は澁いものだ、歌澤其物が既に浮は糾かぬシンミリとした調であるのに彼の澁い唄を以て唄ふのだから堪つたものでない、眞に京城に於ける歌澤派の歌唄のチャンピオンで京城藝妓中には向ふへ廻つて三味の胴へシメリを與れ得るものは一人も無いと君は豪言して居るが此れを聞いた一藝妓曰く『曾野さんは出來相なのをれ呼びにならんのよ』と、併し是れは負吞みである、序を以て云ふが今井門本店の政子は曾つて新富町に自前で出で居た當時曾野君にオカポツてね、イロンな事を言つたもんだとサ(終)

薄月夜渡雁金

▽會計局員買收費八百圓

大尉の顏を見たる君江は何とは知らず胸が迫り言ふも得云はず大尉の膝に泣き伏したり、此れから夜の八時過までは淺黄幕の內の事として成立したる口約の重なるものは「北內とは時期を見て手を切ること」「夫れ迄は月に二三回は必ず當家(吾妻)にて出會すること」と云ふのなりしと、而して其夜の九時過ぎる頃君江と大尉とは宵闇の暗きが結句戀の首尾と手を曳合ひ解けつ縺れつ伴れ立ちて擦れ違ふ若い者に羨ましがられつゝ旭町の妾宅前で熱き接吻を交換し大尉は振り反り見振り反り見つゝ龍山へと歸り行きたり、跡見送りし君江は格子戸に手を掛けしが內より聞ゆる北內君の聲に斯うすりや斯うなる斯う成りや斯うと操て覺悟はしながらも挺持つ足の底氣味惡く一寸躊躇しが何うなるものかと高飛車にガラリと格子を開けるや否『婆アやさん草臥ちやつたよ早く床を展べて頂戴よ、アラ旦那が被在るの、嬉しいはねえ、ヂヤ床は敷いて置いて一銚子燗けて頂戴よ、妾今日口惜しい事を聞いて來たのよ、婆アやさん聞いて頂戴、旦那はね元清華亭の今奴さんに思召があつて夫りや見て居られないんだつてさ、何日棄てられるか知れないんだよ、口惜しいワ妾、眞實に口惜しいワ妾』と口から出任せに怒鳴り付けられた北內君スッカリ捲かれて終ひ決して左樣云ふ事なしと云ふ弱掠に君江の兄の某を呼び寄せ店の取締をさせることにしたるは七月の上旬にて君京後諸事の用達主任を兼ねしめたるより君江の方も都合よく中村君と情交を温めたり煮かへしたり焦げ着かしたりして居たるが好事魔多し君江の實兄は店の金を八百圓許り浪費し使先不明となりて北內君の詰問に會ふや諸官衙の買物掛を買收御馳走したのだと云ふ、开は其內幾分らしく大部分は遂に不明なるより九月中旬解雇され歸國することゝなりしに君江は面目なさに謝いで居たり、內懸しい大尉も東京へ轉任する事になつたので切ての國元の無心三百圓の調達出來ざるを楯に北內君に砂を蹴付けんと企てたるなるが北內君も去る者迂濶とは油斷を見せざるに君江は一間所に閉ち籠つて端唄も唄はず悄いで居るのなりとぞ。芽出度し〱(終)

李王殿下取調を受く

▽東京控訴院の囑託にて

李王殿下曾つて東京滯在中或る藝妓を寵し玉ひ藝妓は遂に殿下の胤を宿せしより殿下に對し始末を迫りけるに當時手元不如意なりしより其手切金を東京麴町區三番町の石塚正治なる人より金一千三百圓を借受け辨濟不履行の儘歸鮮せられしより債權者は辯護士川島仟司外二辯護士を代理とし訴訟を提起したるにぞ殿下は竹下辯護士に依頼して東京地方裁判所に訴訟中なりし事は昨年春本紙に數日に渉り義和宮殿下訴へらると題し報導せしが該事件は一應解決せしに此度は殿下より石塚正治を相手取り不當利得金返還請求の訴訟を提起せられし事件に關し東京控訴院民事部より當京城區裁判所に殿下本人の訊問囑託ありしより來る三十一日宮脇判事は田村書記を隨へ殿下の自邸へ出張する筈なり

基督信者の人間

▽友人の妻と驅落ち

仁川龍洞の資產家李東浩の實弟李東煥(三二)は一廉の紳士にして現に古物商を營み居り且つ同人は大の基督敎信者にして常に會堂の演臺に立ては神の敎へを述へ居る程にて同信者の李光春(四八)なるものとは嘗て別懇の間柄にて李光春の內房にも勝手に出入し居たりしが何日しか妻の金氏と情を通ずるに至り互に大逆上せとなり遂に數日前姦夫姦婦は手に手を受て何處にか姿を晦したるより目下李光春は血眼に成て行衞の捜査中なりと尚同人には錄氏(二二)と云ふ素的美人の愛妾ありしも之れも數日前京城の崔成東と云ふ兩班に四百圓にて落籍されたるより哀れ秋の夜永に兩手の花を失ひしを喞ち居れりと

●秋季庭球大會 總督府庭球部にては廿二日午前九時より秋季大會を倭城倶樂部後庭に於て開催すべしと

●鮮人の姦通事件 仁川府內面林春先の妻金召史(三二)は日常夫婦折合惡く喧嘩の末林方を飛出し兄の金聖起方に厄介に成り居たる間もなく新昌洞六統二戶孔吉男(三二)と情を通じ孔は金召史が有夫なるの情を知りつゝ同棲し居たるより去月十一日林より告訴せられ京城地方裁判所仁川支部に於て取調の結果昨日金聖起は懲役一年半に金召史及孔吉男は姦通罪として懲役二年に處さる

●收容所で亂暴す 神奈川縣中郡大磯町一一二七番地生れ三宅貞雄(三一)は肺病にて八月二十四日行路病者として收容されしか去る十七日輕快退院して本町八丁目に於て露店を開業す可く準備中なりしが該收容所の世話人の處置何か不滿の行爲ありしとて十九日午前三時頃收容所に至り暴行を働きしより警察に訴へられ傷害犯として目下取調中

●仁川の迷兒 十九日午後六時頃仁川紐峴附近を鮮人の男兒一人徘徊し居るより巡回巡査が取調べたる處年齡十二歲とは判明せるも自分の姓名も父母の姓名も住所も知らず何處よりか迷ひ來りし者と判り府內面々長徐相彬に引渡保護中なり

●第二敷島の新妓 仁川敷島遊廓第二敷島から愛の助と名乘て現れたるは菱田きぬ(二五)とて去四十一年馬山は君の都から酌婦と成て流れ〱て仁川は八坂樓で仲居を勤めて居たのだが今度親達の無心で三十三ヶ月間の身の代が三百圓

●醜娼婦も惡い 櫻井町七十一番戶大工職鈴木仁吉(三五)は十九日午後十一時半頃新町遊廓露國人リーパー方にて素見し硝子を破り損害金二十錢を支拂ひ說諭にて事濟みたるが此は確に露娼婦が無理に引込まんとするより起るらし

●高野山の說敎 新町高野山別院に於ては二十日午後七時二十一日午後二時月並御影供を修し說敎使命武師の說敎并に信徒の詠歌等ある筈

演藝だより

▲歌舞伎座 片岡鶴之助浪花節芝居にて極めて好人氣なりと

▲浪花館 福圓一行二十一日の番組は左の如し 西の旅(枝輔)四ノ字でつち(小ゑん)妾ヶ馬(圓松)太神樂曲藝(福樂)田樂喰(圓三)戰地演藝音曲(芝鶴)娘奇術(喜代子)紙屑や(福圓)

▲壽座 後藤一座二十一、二十二兩日演ずる替り狂言一番目は佐藤紅綠子作『鳥の枕』二番目『神田兒』なりと重なる役割は左の如し、東西煙草商會の初賀出に付發行せる觀覽券持參せらるゝ方は木戶場代共無料案內すべし 高岡亮助、斎の牛五郎(內田)觀山禾亡八(藤田)彌太郎女房れ組(深津)佐原敏郎、藤田辰二(藤田)岸田令嬢芳子、藝者小しま 松下辰二父德平、藤の長公(雪岡)岸田醫學博士(後藤)

●訂正 昨紙本欄「念の入つた大鹿馬者」と題する記事中本町五丁目口入屋淀屋としたるは本町五丁目口入業松屋の誤記なりしに付訂正す

行路病者收容所の三十分

本題寄稿 白面子(七)

藤富國商店の寄贈になる牛乳は多く―然り其殆んど全部は僧侶又は小使等の血液となり肝腎の當人たる病者は此の匂だに嗅ぐを得ずとは常人の想像以外の悲慘事ならずや 記「看護人は」○「一人も無し、小使が看護人の資格を有する由なるも萬事炊事鮮人に一任して終日終夜遊び暮らし居れり」記「然らば重症者の看護は」○「輕症者交代にて勤め居れり……數日前の事、只一人の其小使が田舍に遊びに行きし爲め跡には病院へ藥取りに行く人なく三日間服藥を中絕したり」記「寢具は」○「如何に發熱惡寒を訴ふるも薄き敷布團及び掛布團の他は與へられず」記「監督僧は一ヶ月何回位巡視するや」○「一ヶ月一回も無し」記「松谷監督僧侶は只今在院せりや」○「否、横痃を切開して目下和田病院に入院中なり」記「彼も人間なり、然る事もあらん、僕は僧侶が本願寺の炊事女と私通せるやも耳にせり、併し开は本記事に關係なし、只行旅病者として收容せる婦人患者に不始末はなきや」○「有り、昨年七月脚氣患者として收容したる一婦人は行旅病者の番僧○○と私通したる結果婦人は妊娠し一女兒を分娩したり」記「產婆は」○「產婆にあらず醫士なり、當時濟生病院の醫院たりし鶴田醫學士此を取上げられたり」記「其子は如何に處分せしや」○「詳細は知らず」記「然るか、他に特殊の事は無きや」○「有り、大に感謝に値すべき事あり、开は山口太兵衞氏の夫人かめ子は退院患者ある毎に必ず金一圓五十錢宛を惠贈せられ出所後直ちに饑餓に襲はれない樣にせらる、此れ其一なり、次には日出橋際の某理髮師(氏名を逸す)は毎月十七日の休日を利用し一般患者の調髮を爲し與れらる、藤富氏の牛乳寄贈と合せて名聞を求めざる三大美事なり」と語つて彼れは薄き單衣の袖にソト眼を拭ひたり。

以上は實に行旅病舍當時の現狀にして一厘一毛價値の無い所なり、愛國婦人會朝鮮本部の脚下に此の無辜の窮民あることを不思議に思ひつゝ歸る、同情に富める諸夫人、琵琶歌に泣き不如歸に流す淚を希くは此の窮民の上にも灑がれよ、南無(完)

▲附記 前年度の收容所經常費不足金及本年三月以降九月に至る不足金三百圓は警務總監部衞生費中より既に民團に對し補給あり本年度以降も不足分は其補給を右衞生費中より成さるべしとぞ

▲十月十七日田村某なる患者死亡し三宅某退院して露店開業準備中なりと

▲本願寺にても大に省みる所あり着々改善の實を擧げつゝありと終に臨んで僕は被收容者が退院就職後此收容所に對し報恩の擧に出でんことを望まざるを得ず

●天氣豫報(自二十日午後六時至廿一日午後六時) 北の風晴